

日本人の死生観



十五代 沈 壽官

熊本で震災がおきた。断層に沿って壊滅的な被害だ。天下の名城熊本城もはや見る影は無い。原発立地や再稼動についても活断層の存在がとやかく言われる。僕のイメージの中ではゆで玉子の殻を握りつぶした様なイメージの日本の大地だ。どこと言って安全な場所はない。分かっている。しかし、その事を声高に話す学者がTVに登場すると、チャンネルを変えてしまうのだ。分かり切った事を正論として、とうとうと話しているこの人の人柄に不快さを感じてしまう。

それにしても、韓国人によく質問される。『何故、日本人はあの極限の状況の中で、パ

ニックをおこさないのか？我々なら大変な事になるだろう』と。大震災で多くを失っても救援物資が届くとTVカメラに向かって笑顔で謝辞を述べるのである。日本人は、有史以前から大規模な天災に見舞われ続けている。

地震・津波・台風・噴火・竜巻・その度に築き上げてきた家財を失い、一からの出直しを強いられる。まさに復興の歴史である。更にこの天災はこれからも、未来永劫続くのである。こんな自然風土の中、私達日本人は、この世に永遠なものはない。形あるものは必ず壊れる。人は必ず死ぬ。といった無常三原則を叩き込まれてきたのだ。数学者の寺田寅彦は、『日本人には六世紀、仏教が伝来する以前から、天然の無常観が骨に沁み込んでいる。』と説いている。即ち、日本人にとって『死』とは、まさに人生の主題なのである。自分が死後、どの様な評価をうけるのかも重大事で

あろう。つまり、いかに死ぬか。である。日本には古来、『切腹』という世界に類の無い自殺の作法があった。浅野内匠頭が、大石内蔵助を切腹の場に呼び、後事をたくす忠臣蔵四段目は、江戸の市民の大喝采を浴びている。日本人は『死』が嫌いではない。

近世でも太宰治・芥川龍之介・三島由紀夫・川端康成等多くの文豪が自殺している。しかし日本人は決して彼らを悪くは言わない。社会に反逆の意思を持って命を絶つことを悪い事と考えないのだ。又、山々が紅に染まる頃、それを眺めながら自らの人生と重ね合わせ、そろそろいいか。などとつぶやいたりもする。どうやら、『死』へのエクスタシーすら感じているようだ。仏教でいうところのニルヴァーナか？これらの根源にあるのは、先述した無常観であろう。

あきらめざるを得ない。という心境である。

翻って世界はどうであろう。いずれの宗教に於いても自殺は厳禁である。生きて生きて、生き抜けという教えである。避け難い運命として『死』は存在するが、自ら進んで死を選んではいけないのである。この差異はやはり、繰り返される天災の存在にある。自然の猛威に「敗ける」というやり場の無い気持ちを繰り返してきた民族のみが持ち得た感覚である。『草木国土悉皆成仏』という独特の死生観であるのだ。因みに『死生』という言葉は日本語以外には存在しない。あるのは『生死』だけである。

